

Digital CES 2021 レポート

清水 計宏 ●有限会社清水メディア戦略研究所

「CES 2021」はマイクロソフトが構築したプラットフォーム上で完全デジタル開催。コロナ禍のライフスタイルを支援するDX、SX分野の進化が止まらない。

■初めての完全オンライン開催

年明けに米国のラスベガスで開催されてきた世界最大のテクノロジーの一大イベント「CES」は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが世界に吹き荒れる中、2021年については初めてオールデジタルで開催された。当初、2021年1月6～9日の会期予定だったが、「Digital CES 2021」は1月11～14日の4日間にわたり完全オンラインで実現した。主催は民生機・テクノロジー業界の団体である全米民生技術協会（CTA）。

オンラインによるCESは、ライブと録画、Q&Aセッションを含めて、パーソナライズされた没入型体験を提供できるように設計され、基調講演や討論セッションだけでなく、ショーフロアのような製品ショーケースやライブデモ、ミーティング空間も設けた。パネル討論もリモート、ウェブ会議形式となった。

■マイクロソフトがイベントプラットフォームを構築

今回の特徴は、CTAのイベントパートナーとなったマイクロソフトが、プレスカンファレンス、基調講演、Q&A、製品・サービス展示、ネットワーキングなどを含むプログラムのツールとプラットフォームを総合的に手掛けたことだっ

た。ウェブ会議を含むコラボレーションプラットフォームであるTeamsの環境が、データの収集から解析・予測までローコーディングで実現するPower Platformに統合され、クラウドプラットフォームのAzureを通して提供された。CTAは、CES 2021の完全DX（デジタルトランスフォーメーション）化に数百万ドルを投じたとされる。

異例のイベントとなったCES 2021は、従来のよう偶然の出会いによる商談や商機、ネットワーキング、多国間の交流、リアル会場を回遊することによる全体像の把握が困難になったものの、出張する必要もなく、会場・ブース間の移動もなく、長蛇の列に並ぶこともなく、大量のゴミが排出されるわけでもなく、SX（サステナビリティトランスフォーメーション）が叫ばれる中であって、経済効果を計算に入れなければ過去最高のエコな内容となった。

数千人、数万人が同時アクセスしたと推測される中であって、ライブか録画にかかわらずほとんどのセッションは高画質で配信され、受信側の環境が良好であれば画面が止まることもなかった。また、字幕をオンにすれば日本語を含む主要言語の字幕が表示され、英語が苦手な人もしっかり理解することができた。もちろん、英語の手話にも対応した。主なセッションの内容はアーカイブさ

れたり、複数回配信されたりすることで、見逃しや時差のある国からの閲覧にも配慮した。

■1800社超が42分野に分かれて出展

CES 2021は、42分野に分かれて仮想で出展・製品陳列されたが、デジタルヘルス（ヘルスケア、リモートケア／遠隔診断・介護）、DX、ロボット＆ドローン、5G、AI／機械学習、持続可能性（循環経済、環境保護）、電気自動車（EV）および自動運転車、スマートシティ／ホーム／デバイス、XR（AR（拡張現実）/MR（複合現実）/VR（仮想現実））のトレンドがクローズアップされた。併せて、コロナ禍に対処するリモート、非接触、清潔・清浄・殺菌を促す製品やサービスも多数あった。

出展企業は、1800社超とオンラインでは大規模となったが、2020年の4419社の半数以下だった。スタートアップを中心に注目テクノロジーを集めたプレスイベント「CES Unveiled」はなかったものの、各国のスタートアップが集結した「Eureka Park」は設けられ、多数のエントリーレベルの製品が出展された。米中の軋轢が強まる中、中国の出展は大幅に減少した。

■LGの透明OLEDなど進化したディスプレイに注目

コロナ禍で面白いディスプレイの進化も見られた。毎年、圧倒的なディスプレイ展示で来場者の感嘆を誘ってきた韓国LGエレクトロニクスは、55インチの透明OLEDスマートベッドを含む6つのディスプレイを発表。このディスプレイは最大40%の透明度となり、画像を表示しながら向こう側を見ることができる。世界各国で飛沫感染を防ぐためにアクリル板やビニールシートが用いられているが、LGは、レストランやバーラウンジでオシャレな遮蔽としても機能すると提案した。

透明ディスプレイは2015年頃から主要メー

カーも出展しており、2021年のトレンドになるかもしれない。台湾WiseChip Semiconductorはタッチ機能付きの透明な有機ELディスプレイを開発しており、家電品、自動車、交通機関、ウェアラブルの操作パネルに使われている。

LGのプレスイベントでは、若い女性のバーチャルヒューマンがインフルエンサーとして登場し、自律型の消毒用ロボットとともに、体温・呼吸・心拍数などのバイタルサインをチェックできる装着型ツールを発表。併せて、開発中のロール（巻き上げ）式スクリーンのスマートフォンを紹介した。

■ベライゾンが描く5Gを活用した業界刷新

CES 2021では、ほぼ出展企業の数だけニュースが生まれる。その中でも、米国で加入者数トップの携帯電話事業者であるベライゾン・コミュニケーションズのCEOに就くハンス・ベストベリ氏は、バーチャルスタジオを駆使して、ロックシンガーのようなエネルギーな基調講演を行い、新たな取り組みについて語った。

ベライゾンの5Gネットワークは、全米2700都市で2億3000万人をカバーしており、そのうち61都市でウルトラサービスが利用でき、別の12の都市で5Gホームサービスが提供されている。5Gには、高レベルの遅延があった4Gではできなかった、医療、運輸、農業をはじめとする業界を刷新する力があり、たとえば医療では違う国の患者や救急車で搬送中の重病人にも遠隔診断・手術ができるとした。

また、ベライゾンのSkywardユニットと、UPS Flight Forwardが協力し、ベライゾンの4G LTEを利用して2020年に開始したドローンの配送テストは、2021年には5G Ultra Widebandネットワークによるテストに移行し、高齢の顧客にも迅

速で非接触の宅配を提供できると、コロナ禍でのメリットも語った。すでにUPSは、2019年にドローンユニットのUPS Flight Forwardを設けてから、3800を超えるドローン配達便を運航した。

仮想ステージにはNFLコミッショナーのロジャー・グッデル氏と、NFLとMLBの選手を長期間兼業した伝説のアスリートであるディオン・サンダース氏が登場。2021年末までに28のNFLスタジアムにベライゾンの5G Ultra Widebandを広げることが明かし、ARなどによる没入型体験を楽しめるようにすることを語った。

ベライゾンは、没入型の仮想アート／ゲーム体験「Met Unframed」を発表する中で、メトロポリタン美術館やスミソニアン博物館とのパートナーシップを発表。歴史的な遺物・芸術などの収蔵品をデジタル化して、3D AR/VRによる新たな鑑賞体験ができるようにすることも発表した。離れた場所においても、音楽ファンが客席からステージを見ているように感じるVRコンサートなどのエンターテインメントも可能になる。CES 2021開催から5週間、スマートフォンからMet Unframedに無料でアクセスできるという。5Gユーザーは全機能を利用できるが、4G端末でも動作可能。

ドローン配送に関連しては、小売り大手ウォルマートが救命ベンチャーのジップラインと提携し、2021年初めから米国アーカンソー州北西部で試験運用をスタートすることを発表。半径50マイル内であれば1時間以内で健康・ウェルネス製品のオンデマンド配送を実現する計画。

■コロナ禍ならではのロボットや遠隔医療も

お掃除ロボットを含めたロボットも多数出展され、日本のスタートアップであるVanguard Industriesは、AIペット型ロボット「MOFLIN（もふりん）」でベスト・オブ・イノベーション賞

を受賞した。

なかでも、韓国サムスン電子は、秘書ロボット「Bot Care」と家事ロボット「Bot Handy」のコンセプトを発表し話題となった。Careはユーザーの行動・動作を把握・認識して、休息を勧めたり、スケジュールを確認したり、ディスプレイを開いてビデオ会議を始めたりすることができる。Handyは、オブジェクトを認識し、食器をつかんで食洗機に入れたり、テーブルを片づけたりして家事を手伝い、グラスに飲み物を注いだり、花をつかんで生けたりもできる。

ロボット関連では、中国のUBTECH Roboticsが消毒ロボット「UV-C」、フランスのスタートアップのCutiiがコンパニオンロボット「Cutii」を発表。台湾の工業技術研究院（ITRI）はデュアルアームロボットシステム（DARS）を発表した。このロボットは、ピアノを演奏できる人間のような手を備え、製造、ヘルスケア、危険箇所での作業に役立てられるという。

■映像で魅せるソニーがドローン市場へ参入

デジタルイベントでは、映像・イメージ作りが訴求力で差違を生む。映画・音楽会社も傘下に抱えるソニーは、画像・映像能力を駆使し、映画やテレビ制作用のセットやロケーションを3Dのポイントクラウドとして取り込み、ソニーイノベーションスタジオのソフトウエア「Atom View」で再現して、バーチャル映像制作の背景映像としてCrystal LEDディスプレイにリアルタイムに映し出した。バーチャルプロダクションを使って、エピック・レコード所属のシンガーソングライター、マディソン・ピアアがあたかもコンサート会場のステージにいるようなライブ感のあるエンターテインメントを再現した。また、ソニーは、2020年11月に報道発表している、フルサイズミ

ラーレス一眼αを搭載し、AIとロボット工学を統合したドローン「Airpeak」の実像を明らかにして、ドローン市場への参入意志を明確にした。

パナソニックは、車載ソリューションとして、最大11台のディスプレイに個別もしくは共通でコンテンツを表示・再生できるコックピットドメインコントローラー「SPYDR」のほか、次世代のARヘッドアップディスプレイ（HUD）などを発表。

■自動運転から空飛ぶクルマまで、自動車業界の動向

ドイツのメルセデス・ベンツは、高級EVセダン「EQS」向けに、56インチの湾曲したスクリーン「MBUX Hyperscreen」を発表した。洗練されたデザインで直感的操作ができ、最大7人まで個別に操作可能。システムが、ドライバーと乗員を識別でき、操作が最小限になるよう設計されている。

インテル傘下のモービルアイは、CEOのアモン・シャシュア氏が登壇。インテルのシリコンチップをベースにしたLiDAR用SoCによって、2025年までに自動運転テクノロジーを一般の消費者が利用できるようにする方針を明らかにした。

また、GM（ゼネラルモーターズ）のCEOであるメアリー・バーラ氏は、空飛ぶクルマ（エアタクシー）「Cadillac eVTOL（垂直離着陸型航空機）」と自動運転ポッド「Cadillac Halo」のコンセプトほか、急成長しているエコ宅配事業BrightDrop向けの電気商用車「BrightDrop EV600」の計画などを発表した。Cadillac eVTOLは、1人乗りで垂直離着や自動運転飛行が可能で、最速時速55マイルで飛行できる。Haloは、多くのポッドと同じ設計で、複数の人の輸送を目的とし、居間のように内装・インテリアが工夫できる。乗客のバ

イタルサインを読み取り、温度、照明、キャビンの香りを調整できるという。

■AMD、NVIDIAは新たなプロセッサを発表

AMDのCEOに就くりサ・スー氏は、CES 2021でも基調講演に登場し、Ryzen 4000シリーズの性能を上回り、Zen 3アーキテクチャーを採用したノートPC向けAPU「Ryzen 5000シリーズ モバイル・プロセッサ」などを発表。また、NVIDIAはCES 2021に合わせて独自イベント「GeForce RTX: Game On」を公開し、デスクトップPC向けのミドルクラスGPU「GeForce RTX 3060」と、Ampereアーキテクチャー世代では初めてのノートPC向けGPU「GeForce RTX 30」シリーズを発表した。

■コロナ禍で進化する医療業界

このほか、コロナ化で活発化しているデジタルヘルス、遠隔医療関係では、米BioIntelliSenseがCOVID-19症状モニタリングのためのスケラブルで費用効果の高いソリューションとして、モバイル端末と連携する「BioButton」を発表。FDA（米国食品医薬品局）の承認を受けている、1回限りのウェアラブルデバイスで、最大90日間の継続的なバイタルサインの監視ができ、大きさは20セント硬貨ぐらい。安静時の継続的な体温、呼吸数、心拍数を測定し、リスクステータスを計測できる。

また、米国のTeladoc HealthとDexCom、Livongoが、ライフスタイルの変化が血糖にどのように影響するかを把握するのに役立てられ、健康情報を簡単に視覚化できるサービスとして、連続血糖モニタリング（CGM）テクノロジーと糖尿病管理ツールを発表した。

コロナ禍にあって、経済が疲弊している国が増

えている一方で、DXとSXはかつてないスピードで進展していることが、Digital CES 2021で明らかになった。トレンドセッションでも引用されたが、マイクロソフトのCEOであるサティヤ・ナデ

ラ氏が、2020年4月の四半期の決算報告の中で、「たった2か月で2年分のDXが実現した」と語ったことは、まさに全米で巻き起こっていることなのだ。



1996, 1997, 1998, 1999, 2000, ...

[インターネット白書ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2021年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<https://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、データ、URL、名称など）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真・図の作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D（初期は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp

©1996-2022 Impress R&D